

## 発達理論③「マーシア」

©2022sakurakosensei 転載・転売・流用禁止

### 1. 過去の出題

出題回次	概要
平成 18 年	アイデンティティの種類
平成 23 年	自我同一性における早期完了（フォークロージャー）
平成 28 年前期	アイデンティティ
平成 29 年後期	学童期の発達（不適切な選択肢）
令和 3 年後期	青年期の発達

### 2. 人物

ジェームス・マーシア（Marcia, J.E. 1937～）

アメリカ・カナダで活躍した心理学者。E.エリクソンのアイデンティティの概念を発展させ、アイデンティティ・ステータスを4つに分類した。

大学で長く教鞭をとり、引退後はガーデニングとイタリア語の勉強に時間を費やしている。彼はまた、交響楽団でトロンボーンを演奏した経験もある。

### 3. 理論

青年期、アイデンティティ達成に至るまでの過程として、危機と積極的関与を柱にして、4つの段階があることを提唱した。

<危機>アイデンティティ達成に向けて悩んでいるか

<積極的関与>アイデンティティ達成のために取り組んでいるか、努力しているか

アイデンティティ・ステータス	危機	積極的関与
アイデンティティ達成	○	○
モラトリアム	最中	最中
早期完了（フォークロージャー）	×	○
アイデンティティ拡散	×	×
	○	×

これを説明とともに再掲載すると、次のページの通りとなる。

アイデンティティ・ステータス	危機	積極的関与	特徴
アイデンティティ達成	経験した	している	親や社会による価値観から離れ、自分独自の信念で行動できるようになる。
モラトリアム	最中である	しようとしている	達成に向けて悩んでいる状態。
早期完了 (フォークロージャー)	経験していない	している	親や社会による価値観に疑問をもたず成長し、そのままきた。融通がきかないこともある。
アイデンティティ拡散	経験していない	していない	自分が何者かを考えたことがなく、自分自身がわからない状態。
	経験した	していない	積極的関与を避け、無関心の状態であることで、すべての可能性を残しておこうとする。楽観的。

#### 4. 過去問題の引用

出題回次	概要
平成 18 年	アイデンティティの形成過程における地位として、マーシア (Marcia, J.) はアイデンティティ達成、権威受容 (早期完了)、モラトリアム、アイデンティティ拡散の 4 類型を示している。
平成 23 年	マーシア (Marcia, J.E.) によれば、自我同一性地位における早期完了 (フォークロージャー) 型は、自分の目標と親の目標との間に不協和がない。
平成 28 年前期	アイデンティティの実証研究は、マーシア (Marcia, J.E.) によって大きく進展した。彼はエリクソン (Erikson, E.H.) の概念である (危機) と積極的関与を用いて、4 つのアイデンティティの状態を定義し、(アイデンティティ・ステータス) と呼んだ。この発達を検討した縦断的研究によれば、青年期前期から後期にかけて (達成) 状態になることが多くなる一方で、成人期になってから再び (拡散) 状態へと戻ることもある。
平成 29 年後期	(不適切な選択肢)

出題回次	概要
令和3年後期	<p>青年期は、家族以外の人との親密な関係を深めていく中で、青年は（アイデンティティ）の確立という新たな課題に直面する。エリクソン（Erikson, E. H.）は、青年期が、大人としての責任と義務を問われずに、自由に何かに打ち込み、挫折し、さらにまた何かを探し求めるといった経験、あるいは、様々な危機を経ることが重要であるとして、この期間を（モラトリアム）期間であると考えた。</p> <p>その後、マーシア（Marcia, J. E.）は、（アイデンティティ）の状態を4つの類型に分けて考える（アイデンティティ・ステータス）を提唱した。この4類型の中の一つである（D早期完了）は、これまでに危機を経験していることはなく、自分の目標と親との目標の間に不協和がなく、どんな体験も、幼児期以来の信念を補強するだけになっているという、融通のきかなさが特徴的である。</p>